

特集

国の伝統的工芸品

風合い豊かな 羽越しな布

新潟県は工芸品が発達

新潟県には、地域の気候風土を生かしたさまざまな工芸品が発達し、今なお脈々と受け継がれています。なかでも「伝統的工芸品」(※)として国が指定しているものは、現在13産地、16品目にのぼり、これは東京都、京都府に次いで全国で3番目の多さです。(平成29年11月現在、全国で230品目) その県内の16品目のうち、村上市には「村上木彫堆朱」と「羽越しな布」があります。

今回は、山北地区の山々に囲まれた集落で受け継がれている「羽越しな布」を特集します。

※「伝統的工芸品」とは、次の要件を満たし、経済産業省が指定したものです

- ・日用品であること
- ・製造過程の主要部分が手作りであること
- ・100年以上続く伝統的な技術・技法であること
- ・伝統的に使用されてきた原材料であること
- ・一定の地域で産地形成がなされてきたこと

順子のしな布ができるまで



「取材撮影」

大滝 順子
(元地域おこし協力隊員)



【1】しなへぎ
シナノキの樹皮をはく。



【2】樹皮の乾燥
繊維を強くするため乾燥させる



【3】水つけ
樹皮を柔らかくするため浸水させる



【4】樹皮を巻く
樹皮を渦巻き状にする



【5】しな煮
繊維以外を溶かすため、樹皮に灰をまぶしドラム缶で煮る



【6】あまたて・へぐれたて
煮あがった樹皮を一枚ずつはがす





【17】おぜ通し

経糸可動部の針金の穴に糸を通す



【18】おさ通し

細いおさの隙間に順番どおりに糸を通す



【20】くだ巻き

横糸を通すシャトルに管糸を巻く



【21】機織り

糸の色や太さを気遣いながら、幅を合わせて織る



【16】機巻き

絡まり防止や等間隔にするための作業



【19】織りつけ布に結ぶ

糸を束ね、巻き取る軸棒の布に縛りつける



【15】糸へり

天井や壁を使って長い糸の束を作る



【14】粹移し

高速回転でつむ玉から木枠に取り付け乾燥させる



【13】しなより

糸車を使って、糸によりをかけたつむ玉にする



【12】へそかき

かごに溜まった糸を親指に絡めて巻く



【9】天日干し

しっかり乾燥させることで長期保存可能な糸材料になる



【11】しなうみ

裂いた糸同士をねじり合わせて一本の長い糸にし、かごにためる



【10】しなさき

樹皮を爪と指で裂く。均等幅に裂いて糸にして、束ねる



【8】ぬかに漬け川で洗う

米ぬかをまぶし、水を加えて2、3日漬けたあと、ぬかが残らないように清流で洗い流す



【7】しなこき

不純物などを棒などでしごき落とす

しな布の歴史

しな布は、いつのころから織られるようになったのでしょうか。

その起源ははっきりしませんが、平安時代に編さんされた延喜式の中に、貢ぎ物として「信濃布」と記されていることから、当時にはすでに織られていたようです。

日本では昔から、山野に自生する科や楮、葛などの草木から繊維を取り出し、糸をよって織り上げ、衣装や装飾品として利用してきました。藤布や楮布、麻布などの古代織物（原始織物）の一つとして生産されていましたが、木綿や絹の普及、戦後の化学繊維の大量生産に押され、今では産地からも姿を消しつつあります。

現在、しな布は山形県鶴岡市関川と村上市雷、そして山熊田で織られています。平成17（2005）年9月には、上記の産地で織られているしな布が、国の「伝統的工芸品」に指定されました。

しな布の特長

「羽越しな布」の名称は、羽前（山形県庄内地方）の【羽】と越後（新潟県）の【越】を取って名づけられました。山深い産地で、厳しい冬期間の貴重な収入源として受け継がれてきた羽越しな布。その技術・技法は連続と受け継がれ、現在も多くの人を魅了し続けています。

羽越しな布は、山間部に生育するシナノキの樹皮から靱皮を剥ぎ取り、その繊維を糸にして布状に織り上げたもので、ざつくりとした手触りと落ち着きのある風合いが特長です。昔は衣類や穀物を入れる袋、酒・豆腐などのこし袋、蒸籠の敷布など、主に生活用品として幅広く使われていましたが、現在はその特長を生かした帯、のれん、バッグ、帽子など、生活に彩りを与える趣味の工芸品として生産されています。

さんぽく生業の里

実際にしな布が織られている山熊田集落を訪ねてみました。府屋にある市役所山北支所から車で約30分。山熊田集落は男性25人、女性20人が住む18世帯の集落です。

この山熊田集落に羽越しな布や赤カブ漬けなどの生業を観光資源として活用し、多くの人と交流を図ろうと有志が平成12年に設立した「さんぽく生業の里」という施設があります（左写真）。この施設は、昨年度2280人の観光客が訪れた隠れ家的スポットで、しな布の機織りなどを体験することができます。

この施設の支配人の國井千寿子さんに、しな布についてお話しをお聞きしました。



さんぽく生業の里(山熊田325)
☎・FAX:76-2115
羽越しな布の機織りや赤カブ漬け、あく笹巻き作りなどの体験ができます

しな布の良さとは

しな布の良さについて尋ねると「それはしな布を使った人が感じる「ことだよ」と國井さん。確かにいく

ら言葉で良さを表現したところで、感じ方によって人によってそれぞれ違うものです。



國井さんがおもむろにしな布で作った帽子を2つ見せてくれました。山熊田集落で作ったもの与其他のところで作ったもの。帽子を良く見てみると、生地目の細かさが明らかに違ってきます。編み込みの糸が2本と1本の違いで、山熊田集落で作られたものは目が細かい1本の方でした。「作るのに倍の時間か



國井千寿子さん

かるけど、高品質が保たれる「品質にこだわる産地だからこそ、妥協は許しません」。

しな布で最もこだわるのは、糸つくり(前のページの10と11の工程箇所)。いかに糸を均等の細さで作ることができかが重要で、ここで妥協するとその後の工程に大きな影響を与え、良い商品はできないそうです。ここで織られたしな布は、9割が帯として京都市や米沢市に納品されることから、いかに品質が良いかわかります。

機織りの3人

現在、この施設で機織りをしているのは、大滝朝子さん、大滝栄子さん、大滝ムツ子さんの3人です。栄子さんとムツ子さんは平成10年にフランスでしな織り実演を行った経験があるそうです。3人は織る最中になんども手を止め、糸のほつれや太さを手直ししていました。

この3人に一番気をつけていることを尋ねると、

3人とも同じ答えが返って来ました「端の部分をしつかりとさせ、織り幅をぶれないようにすることだね」。



端を整えることが大事

織りながらも何度も物差しで布の幅を測ります。一本一本の糸の太さが違つために織っていくうちに幅が微妙にずれてくるとのこと。帯の幅である31・5センチを、きっちり保たないと商品としては成り立ちません。このこだわりが高品質を保ちます。



大滝朝子さん



大滝栄子さん



大滝ムツ子さん

伝統継承に 地域おこし協力隊がいく

藤沢 弥由 隊員

(24歳)

今年4月にしな布継承を使命として入隊。長野県出身。旅行とスキューバダイビングが趣味で、卵と海藻類が大好物。



大滝 順子 元隊員

(40歳)

山北地区で3年間隊員として活躍し、今年3月で任期を終えた。埼玉県出身。山熊田の魅力にどっぷりとはまり、2年前に地元山熊田の男性と結婚。



今年4月から、村上市地域おこし協力隊山北地区担当として、しな布の活動を行っています。情報発信や作業工程の記録、技術の継承に取り組んでいます。

日本の伝統文化を育む仕事がしたいと思っていたことがきっかけで、しな布の協力隊募集を知り、山熊田に住む人々の生命力やしな布が持っている自然の力強さと優しさに惹かれ応募しました。

山熊田での活動は、驚きと発見の連続です。自分の中の世界観が変わり、自分が何か新しい別のものに生まれ変わった気持ちになります。

その暮らしの中で生み出されるしな布には、受け継がれてきた文化や人々の力が詰まっています。そんな魅力に溢れている山熊田のしな布を伝え残していきたいと考えています。



しな布のことは移住して初めて知りました。マタギを取り巻く文化や生き方への圧倒的な興味が移住の動機でしたが、その家々でおばあちゃんたちが糸を績んでいたのです。

樹皮から布を作る魅力、類まれな文化とその歴史の尊さ、そして大変な作業への理解は知るほどに増しました。全国での評価は大変高くニーズもあるこの布が

絶滅危惧を迎えている今の現状に、私はリスクの高い選択を迫られましたが、答えは案外簡単に出ました。山熊田のおばあちゃんたちから「しな布作りを誇りに思い、無くなれば悲しい」と聞いたからです。私だって日本が誇る原始布の滅びゆく様を見たくないですから。

村上にはこれほど強烈な伝統工芸がありません。課題は山盛りですが、機織り見習いを始めました。すごいばあちゃん先生ばかりのこの地域がより沸き立つよう、トンテンカラリと高らかに機の音を響かせたいと思っています。



しな布の課題は

どこの伝統的工芸品産業でもいわれているのが後継者不足の問題です。現にさんぼく生業の里の機織りの3人も70代。そして、市内でもう一つのしな布産地の雷集落も高齢化が進んでいます。途絶えさせてはならないと、市としても技術の継承に「地域おこし協力隊員」を全国から募り、この課題に取り組んでいます。

誇れる工芸品

羽越しな布が伝統的工芸品の国指定を受けたのが旧山北町時代の平成17年。山北地区以外の市民の皆さんにはあまりなじみがないのかもしれませんが、羽越しな布は、市民の皆さんにとって誇れる工芸品です。名刺入れや小銭入れ、ペンケースなど日常的に使えるものも多くあります。ぜひ、多くの工程を経て作られた古代布の奥深さと風合いを感じてほしいと思います。

参考文献

- ・中嶋哲夫(2016)『奇跡の企業組合「生業の里」―遺暦を超えたお母さんたちの挑戦―博進堂
- ・村上市観光協会ホームページ「羽越しな布の歴史」
- ・東北の伝統的工芸品ホームページ「山形県 羽越しな布」



村上市制施行10周年記念式典で来賓者に贈られた村上木彫堆朱のぐい呑みとしな布のぐい呑み専用巾着